

1.麻疹

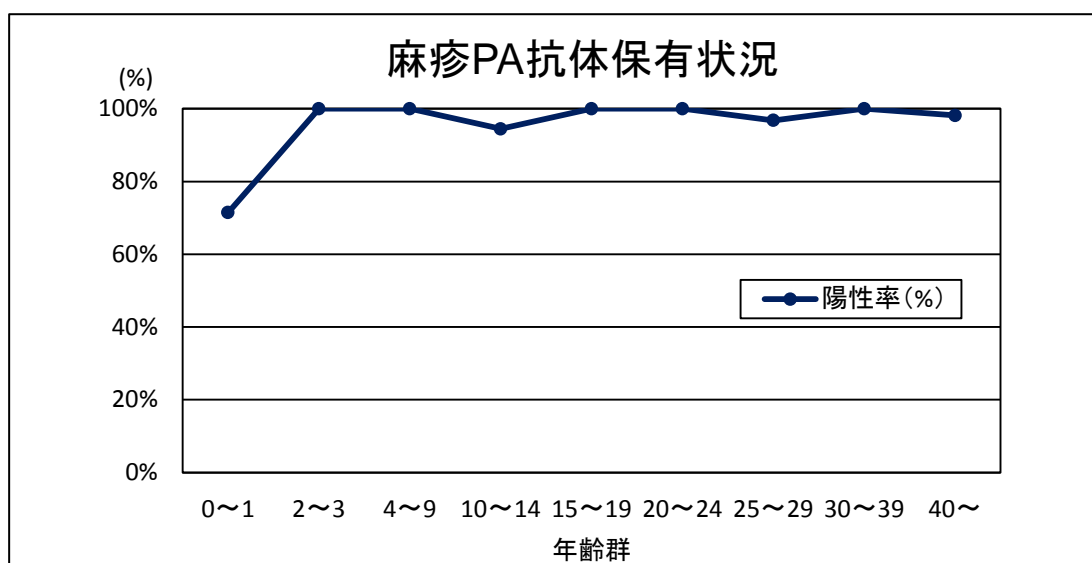
1) 検体数

年齢群	0～1	2～3	4～9	10～14	15～19	20～24	25～29	30～39	40～	合計
検体数	21	20	22	18	15	13	31	58	163	361

麻疹は合計361検体についてゼラチン粒子凝集 (particle agglutination: PA) にて麻疹PA抗体価を測定した。各年齢群の指定検体数は22で、0～1歳、2～3歳、10～14歳、15～19歳、20～24歳の年齢群で指定数に達しなかった。

2) 麻疹PA抗体保有状況(%:PA価16倍以上陽性)

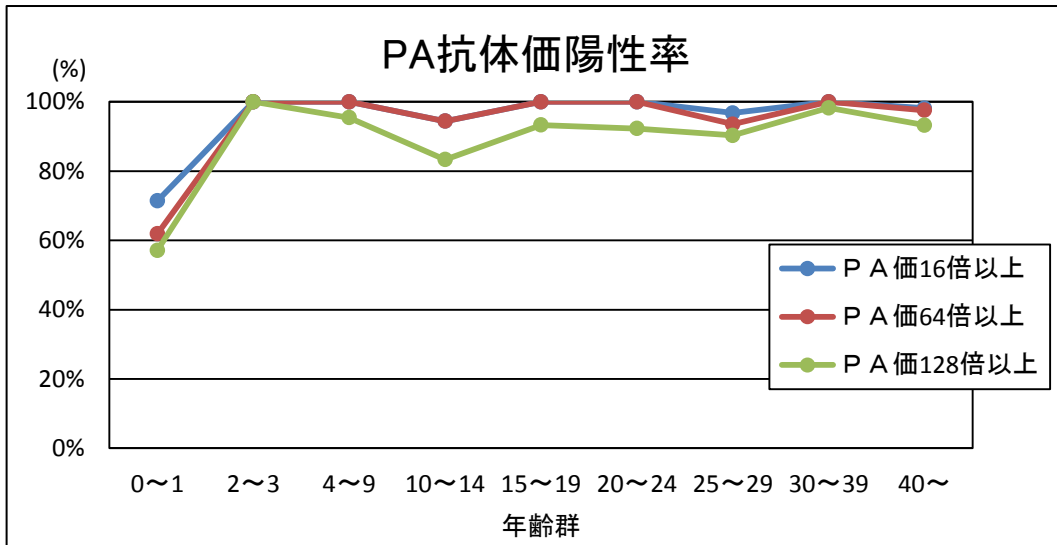
年齢群	0～1	2～3	4～9	10～14	15～19	20～24	25～29	30～39	40～
陽性率(%)	71.4%	100.0%	100.0%	94.4%	100.0%	100.0%	96.8%	100.0%	98.2%



麻疹抗体保有状況は、2～3歳、4～9歳、15～19歳、20～24歳、30～39歳の年齢群で100%であった。10～14歳の年齢群で陽性率が95%を僅かに下回ったが、0～1歳を除くその他の年齢群では陽性率が95%を超え高い保有率を維持していた。0～1歳、2～3歳、40歳以上の年齢群では昨年度より上昇した(昨年度はそれぞれ48.1%、94.7%、97.5%)。

3) 麻疹PA抗体価別陽性率(%)

年齢群	0～1	2～3	4～9	10～14	15～19	20～24	25～29	30～39	40～
PA価16倍以上	71.4%	100.0%	100.0%	94.4%	100.0%	100.0%	96.8%	100.0%	98.2%
PA価64倍以上	61.9%	100.0%	100.0%	94.4%	100.0%	100.0%	93.5%	100.0%	97.5%
PA価128倍以上	57.1%	100.0%	95.5%	83.3%	93.3%	92.3%	90.3%	98.3%	93.3%



抗体価は修飾麻疹を含めた発症予防可能レベルを考えるとPA価128倍以上が望まれる。平成30年度はPA価128倍以上の陽性率が2～3歳では100%であり、10～14歳以外の年齢群では90%以上であった。

確実な免疫を得るために、2回の定期接種を受けること、麻疹の罹患歴や予防接種歴が明らかでない場合には予防接種を受けること、また、接種歴が1回の場合や流行国に渡航する場合等には、2回目の予防接種を検討することが重要である。

2.インフルエンザ

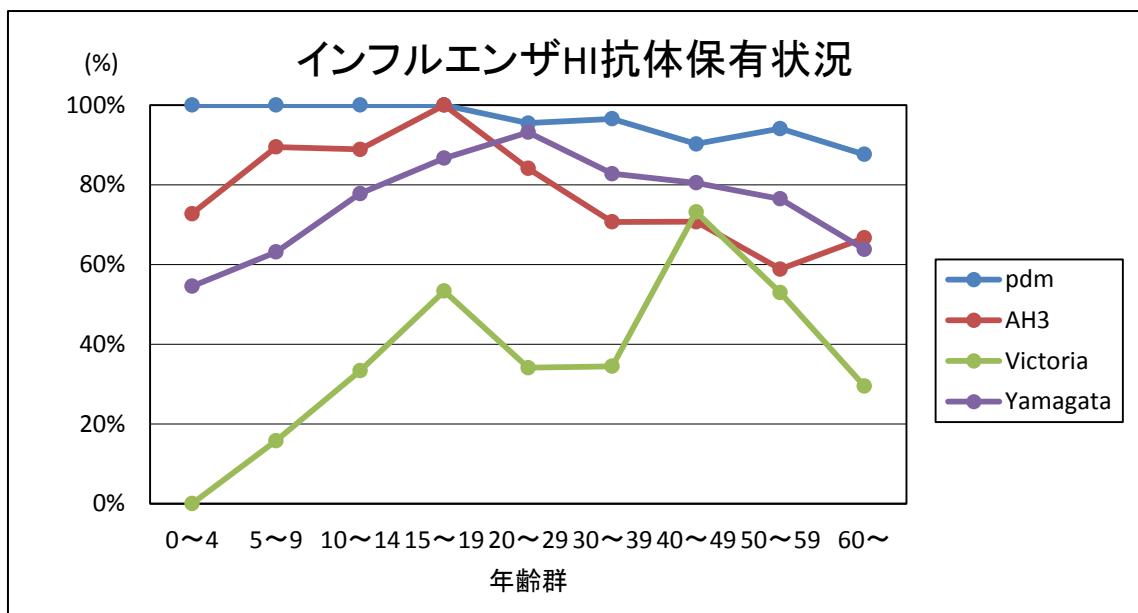
1)検体数

年齢群	0～4	5～9	10～14	15～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～	合計
検体数	44	19	18	15	44	58	41	17	105	361

インフルエンザは2018/2019シーズンのインフルエンザ流行前かつワクチン接種前(5月～10月)に採取された血清合計361検体についてHI抗体価を測定した。各年齢群の指定検体数は22であるが、5～9歳、10～14歳、15～19歳、50～59歳の年齢群で指定数に達しなかった。

2)インフルエンザHI抗体保有状況(%:HI価40倍以上陽性)

年齢群	0～4	5～9	10～14	15～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～
pdm	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	95.5%	96.6%	90.2%	94.1%	87.6%
AH3	72.7%	89.5%	88.9%	100.0%	84.1%	70.7%	70.7%	58.8%	66.7%
Victoria	0.0%	15.8%	33.3%	53.3%	34.1%	34.5%	73.2%	52.9%	29.5%
Yamagata	54.5%	63.2%	77.8%	86.7%	93.2%	82.8%	80.5%	76.5%	63.8%



インフルエンザHI抗体保有状況は抗体保有率(HI抗体価1:40以上:感染リスクを50%に抑える目安)について示している。抗体保有率は調査に用いたインフルエンザウイルスの型・亜型・系統によって異なり、A(H1N1)pdm09亜型では0～4歳、5～9歳、10～14歳、15～19歳、A(H3N2)亜型では15～19歳、B型(山形系統)では20～29歳が他の年齢群と比較して高い傾向がみられた。B型(ビクトリア系統)ではすべての年齢群で抗体保有率が低く、15～19歳、40～49歳、50～59歳を除く他の年齢群では35%未満であった。